**桃太郎　鬼視点　アクション練習**

「私は桃太郎ッッ！！　お前は討ち取る男の名だッ！　よく覚えておくがいいッッ！！」

　その若者がそう吠えた途端、白刃の刃が眼前を掠めた。

　危うく、バックステップを踏んで跳び退くも、一歩遅ければ確実に目を潰されていた。

　桃太郎と名乗ったこの若者は、鬼が知るどの人間とも違っていた。

　自分のおぞましい姿を見ても、平然として。容赦なく刃を振り下ろす。人間が必ず持ち合わせる恐怖の念を振り切れるだけの精神力をこの若者は持ち合わせているのだ。

　眼光は鋭く細められ、対峙する自分をただまっすぐと見据えている。その集中力も凄まじい。これは小細工や騙し討ちの類が通じる相手ではないと無意識に理解させられた。

「……次は切る」

　桃太郎が一気に、間合いへと飛び込んだ。その跳躍力はさながらに全身が強靭なバネのようである。振るう日本刀も、我流剣ながら確実に此方のガードを抜けて来る。

細い剣先と小さな体格を最大限に生かした戦い方だ。

「そこッッ！！」

　桃太郎の刃が右目を抉った。

「がぁぁぁっ！？」

　途端に鬼を襲うのは灼熱感にも似た痛み。鮮血が舞い散り、途端に視界が赤く染まる。

「何を大袈裟な。貴様のような妖の類ならば、その程度の傷。すぐに治すこともできるのであろう？」

「ッッ……！！」

　確かにその通りだ。鬼にとって、抉られた目や切られた首を繋ぎ合わすなど造作もないこと。しかし、それは充分な休養が取れる場合に限った話でもある。戦闘中の再生など、とても出来るような芸当ではなかった。

「────うるせぇぞ！」

　ブンッ！　と身の丈ほどの金砕棒を振るうも、桃太郎はそれを軽々しく避わして後ろに飛び退く。金棒を振るった勢いの豪風も、桃太郎にとってはそよ風のようなものなのだろう。

　その余裕なツラが頭に来た。

「やってくれんじゃねぇか、人間よ。手傷を負わされたのなんて、何十年ぶりだろうな」

　だが、おかげでようやく此方も目が覚めた。数十年、戦いから離れていたブランクが今、元に戻りつつある。

　忘れていた感覚を思い出せ。闘争におけるスリルと興奮。何より、敵をこの金砕棒で砕く愉悦を。

「はっはははは！！　テメェは俺が本気で相手をしてやんよ！！」

　鬼は金砕棒を持ち替えた。バットの柄を両腕で掴むような構えから、その巨大な金属塊に自分の姿を隠すようにと。

　桃太郎の得物はあの刀一本だけだ。あの刀がどれほど頑強な名刀であろうとも、人間の筋力にはどうしたって限界がある。

　ならば、答えは簡単だ。────轢き潰してしまえばいい。

　自分はこの巨大な金砕棒へとその身を隠し、力比べに持ち込めば、あとは筋力と重量で壁際へと押し込み、そのまま圧殺してしまえばいいだけの話だった。

「トラックに退かれるってのはこんな気分なんだろうなッッ！！」

　足場を蹴って加速。

　猛突進する鬼が、桃太郎を捉えた。